

トピックス…③ 酪農教育ファーム “夏の研究集会”を開催

日本酪農教育ファーム研究会（会長：新宿区立鶴巻小学校 校長 國分重隆）は8月1日、新宿区立鶴巻小学校において「酪農教育ファーム“夏の研究集会”」を開催した。本年度の研究集会は、昨年度まで別に行われていた酪農教育ファーム実践研究会と合同で開催することとなり、全国で酪農教育ファームを実践している酪農関係者、教育関係者など約50名が参加した。

酪農教育ファームを学校教育現場に定着させていくため、酪農家と教育関係者のネットワークを強化する目的で共催となった本年度の研究集会では、3題の報告と、出前授業高学年向けモデルカリキュラムに関するグループディスカッションが行われた。なお、出前授業高学年向けモデルカリキュラムについては、本研究集会での成果を踏まえて修正を加えた上、足立区立平野小学校（11月30日）においてカリキュラムに沿った学習を展開し、その効果を検証する。

報告①「いただきます」の言葉のうらに ～酪農体験から伝えたい食と命の大切さ～

北海道浜頓別町で酪農を営む小川文夫氏は、酪農は命を芽生えさせ、その命を誕生させ、その命を育て、その命を終わらせる産業であり、酪農教育ファーム活動には、“食と命の大切さ”を伝え、人間を育てる力があることを強調した。同氏の牧場での酪農体験は、青空教室、子牛の哺乳、搾乳体験等から構成されており、とくに青空教室の内容は、酪農体験者が「牛の一生」から食や命の大切さを学べるように配慮している。



青空教室の様子

報告②「学び学ばされて生きるのさ ～酪農という生き方には多様な学びがある～」

新宿区立淀橋第四小学校・教諭の秦さやか氏は、子どもの“学び”に与える酪農の可能性を強調した。また、食品の分類などにとどまる多くの食育に対し、食と命という大きなテーマで教科の枠を越えて多様な教科・領域で行うことができる、酪農教育を通じた食育のあり方を紹介した。

子どもの学びに与える酪農の可能性



報告③「出前授業の教育的効果」

荒川区立第七峡田小学校・副校長の古庄輝男氏は、酪農体験を通して牛乳、乳牛、酪農家の仕事に関心をもち、自ら問題を見出して解決する活動を通して、命の大切さに気づかせ、食べ物に対する感謝の心を育むことをねらいとして実施した出前授業（わくわくモーモースクール）の内容を報告した。

また、大妻女子大学・准教授の石井雅幸氏は、荒川区立第七峡田小学校で実施した出前授業（わくわくモーモースクール）の教育的効果について考察した結果を報告した。

出前授業（わくわくモーモースクール）の事前・事後に実施した意識調査により、「酪農体験で、牛乳、乳牛、酪農家の仕事に興味・関心をもち、自ら問題を見だし解決する活動を通して、命の大切さに気づかせ、食べ物に対する感謝の心を育む」という酪農教育ファームの教育的効果が確認された。また、問題意識の芽生え、体験活動や図書資料の活用から、カリキュラムのねらいを達成することができたと評価された。